

### 3) ヒトリシズカとフタリシズカ＝一人静と二人静

ヒトリシズカはセンリョウ科の多年草で、各地の丘陵地帯や低山帯の林下に生え、朝鮮半島や中国などにも分布する。高さは15～30cmほどになり、葉は長さが10cmほどの卵形もしくは楕円形の単葉で対生するものの、茎頂近くでは節間がつまり、4枚が輪生しているように見える。茎は紫色を帯びて直立し、節が3～4個ある。春、葉の間から1本の花穂を出し、小さい白い花が長さ3cmほどの穂状につく。和名のおこりは花穂が1本出たためフタリシズカに対するもので、静は『静御前』にちなむものである。別称としてはヨシノシズカとかマユハケソウなどともいう。学名は『*Chloranthus japonicus*』で、属名は黄緑色の花というほどの意味のギリシャ語に由来するものである。また中国での呼称は『及巳』(ギユウイ)である。

さて一方のフタリシズカは同じセンリョウ科の多年草で、山地の林内のやや湿り気の多いところに自生し、日本以外では中国の南部に分布する。ヒトリシズカに比べるとかなり大きく高さは30～60cmになり、葉は長さが8～15cmの楕円形で対生するが、上部の葉は詰まっており、下部の葉は退化して鱗状になる。4～5月頃、茎の先に穂状の花序を2～3本出して、花弁のない白い小花を多数つける。和名の由来はヒトリシズカに似るが、花穂を2本出すために名付けられたものである。この他にも『静御前』の持つ長刀に例えたものとか、謡曲『二人静』に因んだものとする説もあるがこれは後述する。別称にはサオトメバナとか、ツキヌグサなどがある。学名は『*Chloranthus serratus*』で、種小辞は鋸歯のあるという意味である。

江戸時代の中期、享保4年(1719年)に伊藤伊兵衛によって著された『公益地錦抄』(コウエキチキンショウ)では、ヒトリシズカを『及巳』(ギユウイ)として「三、四寸の小草なるがあひらしく鉢に植えて…」と記され、薬草として図示したうえで、さらに続けてフタリシズカを「又一種あり、形状同じ事して高さ二尺ほどに…」と対比的に記している。しかしここではヒトリシズカという記述もフタリシズカという記述もない。一方、正徳3年(1713年)に寺島良安により著された『和漢三才図絵』(ワカンサンザイゾエ)では吉野静(ヨシノシズカ)と二人静を、対比的に取り上げ、特にフタリシズカは謡曲『二人静』を引き合いに出して、二本の花穂が艶美に並び、義経の愛妾『静御前』の霊が、吉野山で若菜摘みに出た女に乗り移り、同じ衣装を着て舞い遊ぶ姿に例えて、二人静と名付けたことを記述している。

また幕末の1844年に著された『重修本草項目啓蒙』(チョウシュウホンゾウコウモクケイモウ)には「ヒトリシズカ一名ヨシノシズカと云う」と記され、この頃になるとヒトリシズカとフタリシズカは、一対で語られて広まり、栽培されるようになったらしい。この両種は最近の野草ブームの影響で、ときおり花屋さんの店先で見られることもあるが、実際栽培するとなると、日光の管理と水やりがなかなか難しい。特にこの両種のように野趣に富んだものは、やはり野におけ蓮華草なのだろう。



ヒトリシズカの花。珍しい花のようだが、軽井沢や那須の別荘地などでは普通に見ることができる。ただこの花の季節は、あまり別荘地に行く機会がない(神奈川県藤野町)。



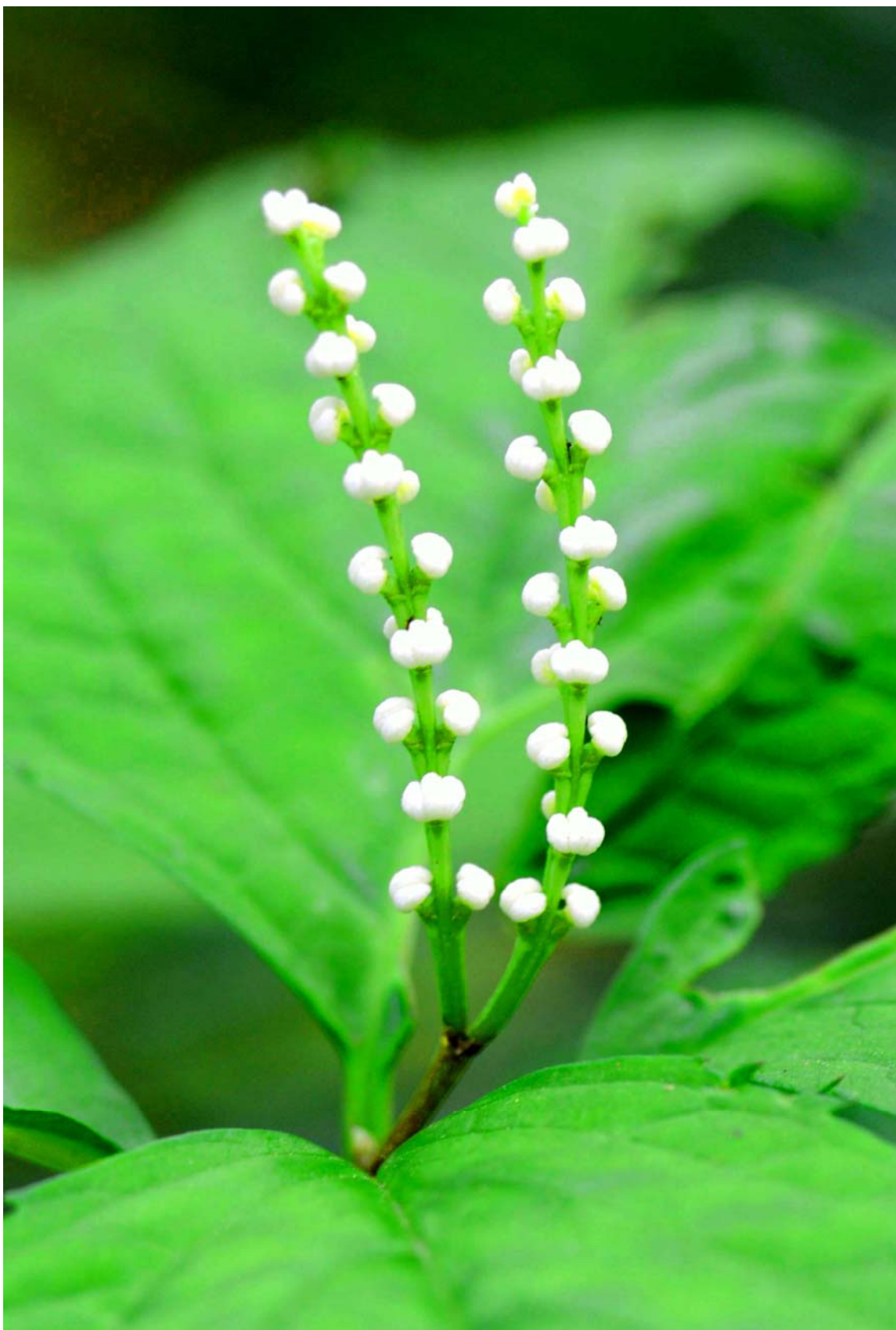
芽を吹き出した直後のヒトリシズカにはなんともいえない春の息吹が感じられる(軽井沢町)。



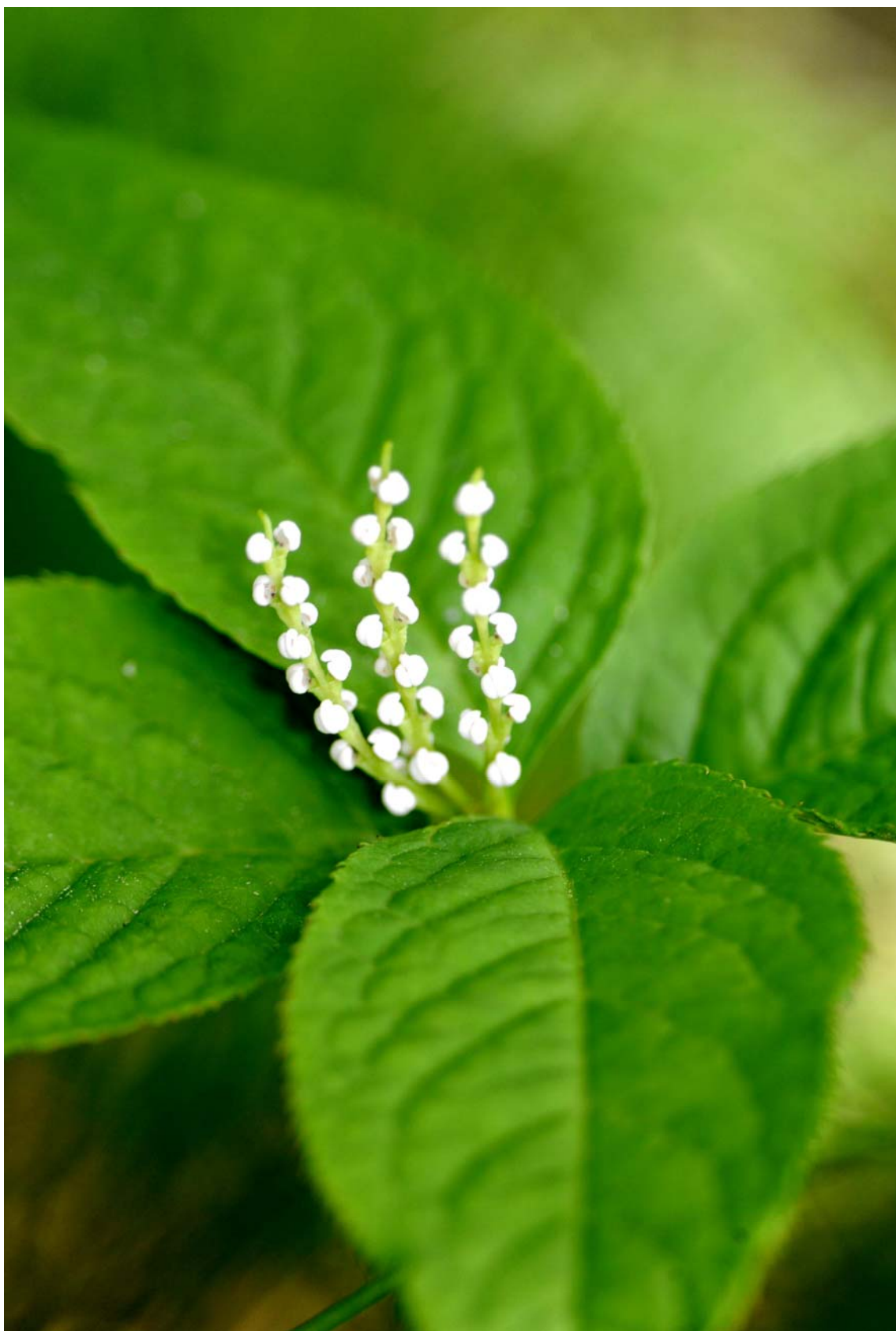
フタリシズカは年月が経つと、意外と大きな株になる(長野県軽井沢町)。



花穂が対になって出るために生まれた呼称で、新緑のころに開花する(長野県軽井沢町)。



フタリシズカの花(東京都小石川植物園)



フタリシズカはこのようにしばしば賑やかになってしまう(長野県軽井沢町) [目次に戻る](#)